九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

義太夫節浄瑠璃本における山本版に対する他版の抵抗

横山，正
大阪教育大学名誉教授

https://doi.org/10.15017/11926

出版情報：語文研究. 68, pp.41-50, 1989-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

義太夫節浄瑠璃本における山本版に対する他版の抵抗

横山　正

一

義太夫節の素人向きの稽古本（俗に言う丸本）は古くより山本九兵衛・同九右衛門版などの書肆山本両家の出版になるものが最良と考えられた。また丸本の奥書にもそれを主張していることは周知の事実である。近松作品に関しては、これは認められてよいと考えられる。しかしそれ以外の浄瑠璃の場合、必ずしもこのことは常に是認されるとは言いえないのではなかろうか。

いまここに、同じ題材を浄瑠璃（義太夫節）化した二つの作品を採り上げて吟味してみたいと思う。

『那須与一小桜威』（竹本筑後掾正本・八行二十九丁・半紙本・山本九兵衛版）（この左側に山本九右衛門版とあったらしい空白があるが破損）・第九丁目が一丁補写（早稲田大学演劇博物館本）

『那須与市小桜威ノ船遺恨』（竹本筑後掾正本・八行三十二丁・献上本・本屋仁兵衛版）（架蔵本）

この二本については、かつて『語文』（大阪大学国文学研究室編輯）第三十二輯に「筑後掾本『那須与市小桜威』の浄瑠璃史的意義」の題名で書いたことがあるが、その時は浄瑠璃本文に付けられている文字譜については殆んど触れなかった。しかし音曲である浄瑠璃本文を論ずる場合、胡麻点はともかくとしても、文字譜には少なくとも一応注目しなければ、浄瑠璃本文の比較研究には不完全と言わざるをえないであろう。従って今回は文字譜（句点も節符の一種とみて加える）をも併せて二作品を考察することによって、『那須与一小桜威』と『那須与市小桜威ノ船遺恨』とが持つ意義の相違を究明しようと試みるものである。

次にこの両作品の同文または酷似の部分（文章が異なれば当然節付も変化の可能性が出るので）に付けられている文字譜の全部を上下対照の形式により掲げる。たゞし本人の仮名と漢字との違い、濁点の有無の違い、表記形式の違い（例えば与市と与一）、片仮名と平仮名との相違、仮名遣いの相違などは同文とみる。

〔表一〕

那須与一小桜威 山本版				那須与市小桜威ノ船遺恨 仁兵衛版			
丁	オ・ウ	行		丁	オ・ウ	行	
1	オ	6	おはしけり	1	ウ	1	おはしけり（ハル）

4	4	4	4		4	4	4	3		3	3	2	2	2	2			1	1		1	1
ウ	ウ	ウ	ウ		オ	オ	オ	ウ		ウ	オ	ウ	ウ	ウ	オ			ウ	ウ		ウ	オ
4	2	2	2		8	3	1	2		1	7	7	5	3	2	1		8	6		2	6
			一ㇰに					まさごをも。							水も七たび	ちごは						
			のゝしれば。					さだ国は														
			宗高たまりかね					山おろしはげしく														
			かゝるくはんげん					はちやのくはんじ														
								や														

4	4	4	4		4	4	4	3		3	3	3	3	2	2	2		2	2		1	1
ウ	ウ	ウ	ウ		ウ	オ	オ	ウ		ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ		ウ	オ		ウ	ウ
7	5	4	4		2	4	3	4		3	1	2	1	7	7	2		1	6		7	1
			ㇰに					まさごをも														
			のゝしれば。					さだ国は。														
			宗高たまりかね					山おろしはげしく														
			かゝるくはうげん					くはんじや														

7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5	4
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ	ウ
5	4	4	4	1	5	2	1	8	7	5	2	8	7	7	1	1	1	3	6	4	2	8
																						小兵
																						大ひやう
																						御ほんい
																						こぎもどせば
																						今やゝ〳〵と。
																						よばゝれば
																						宗高聞召。
																						さだ国成か
																						さしかざし
																						たせいが中へ。
																						たせい
																						大かりまた
																						さきに
																						にげて行
																						しよせん
																						かちどき
																						下り
																						ないだんし。
																						申上る
																						しこうせしが
																						候へば
																						どうじ給ひ
																						召上て
																						ゑちごの国

8	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	6	5	5	5	5
オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ
7	6	5	4	2	6	2	1	8	7	5	1	1	7	6	6	7	7	6	8	1	8	5	2
																							小ひやう。
																							大ひやう。
																							御ほんい
																							こぎもどせば
																							今や。〳〵と。
																							よばゝれば。
																							宗高聞召
																							さだ国成か。
																							さしかざし。
																							たせいが中へ
																							たせい
																							大がりまた
																							さきに
																							にげてゆく。
																							しよせん
																							かちどき
																							下り。
																							ないだんし
																							申上る。
																							しこうせしが。
																							候へば。
																							どうじ給ひ。
																							召上て。
																							ゑちごの国。

7	ウ	6	上意(色)	8	オ	8	上ゐ
7	ウ	6	はかるべき	8	オ	8	はかるべき。
7	ウ	7	今や〳〵	8	ウ	2	今や。〳〵
7	ウ	8	宗高(地)は	8	ウ	2	宗高(地中)は
8	オ	2	はちやめに	8	ウ	4	はちやめに
8	オ	5	涙(スエテ)を	9	オ	1	涙(スエテ)を
8	オ	6	次第(中)かな	9	オ	3	次第かな。
8	ウ	1	泣々わかれ	9	オ	6	なく〳〵。わかれ
8	ウ	2	世(地ウ)のせいすい	9	オ	7	世(地色中)のせいすい
8	ウ	2	道ふさがしよ(ハル)ゑん	9	オ	8	道房がしよ(ハル)ゑんに
8	ウ	2	に任(中)せしなのゝ国	9	オ	8	まかせ(中)。しなの(地)ゝ国
8	ウ	3	川中嶋に	9	オ	8	川中嶋に。
8	ウ	3	うき世を忍(フシ)ふ	9	ウ	1	うき(フシ)よを忍ぶ
8	ウ	3	かげをかくして。	9	ウ	1	かげ(ハルフシ)をかくして。
8	ウ	3	宗高(中ウツ)	9	ウ	1	宗高(地色)
8	ウ	4	またたいないに	9	ウ	2	まだたい(ウ)内に
8	ウ	4	五っ月の。	9	ウ	2	五月(ハル)の。
8	ウ	4	然(ウ)も	9	ウ	3	しかも
8	ウ	5	父にゝて。	9	ウ	3	父に(中)にて。
8	ウ	5	あかさせ給ひ	9	ウ	4	あ(ウ)かさせ給(中)ひ
8	ウ	5	ある時北(ハル)の	9	ウ	4	有(地)時北の
8	ウ	6	北(ハル)の御かた	9	ウ	4	北の御かた

8	ウ	6	もり(ハル)岡	9	ウ	5	森岡
8	ウ	6	ゆめを見る	9	ウ	5	夢を見る。
9	オ	7	いそがるゝ	10	オ	8	急がるゝ。
9	オ	7	とある所(ハル)に	10	ウ	1	とある所(ハル)に
9	オ	7	あらうらめしの	10	ウ	1	ア、うらめしの
9	ウ	3	きもたましゐも	10	ウ	6	上(フシ)きもたましゐも
9	ウ	5	諸事(地色)のあ(ハル)はれ	10	ウ	8	諸事の。あ(ハル)はれ
9	ウ	6	北の方と姫(ウ)君も	11	オ	3	北のかたも姫(ウ)君も
9	ウ	8	心(スヘテ)静に	11	オ	5	心(スエテ)しづかに
9	ウ	8	扨(地色中)下かう	11	オ	6	扨(地色中ウ)下向
10	オ	5	見送りて	11	ウ	4	見(ウ)おくりて
10	オ	6	ゆゝしき我子やな。	11	ウ	5	ゆゝしき我子や(上)な。
10	オ	8	おめきさけばせ給へ共。	11	ウ	6	おめきさけ(トル三重)ばせ給へ共。
10	ウ	1	もだへ。こがれて	11	ウ	8	もだへ。こ(フシ)がれ(ハル)て
10	ウ	8	たゞこれなるは	12	オ	8	只。是なるは
11	オ	6	ひろはせ(フシヨクリ)給ふ。	12	ウ	5	ひろはせ(フシヨクリ)。給ふ。
11	オ	6	かう〳〵の	12	ウ	5	かう〳〵の
11	オ	6	す(中)がたぞ	12	ウ	5	す(中)がたぞ。
11	オ	7	身は	12	ウ	6	身は(ハル)
11	オ	8	夜(中)はまだふかく	12	ウ	6	夜(中)をまだふかく

15	15	15	14		14	14	14	14	13	12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	11		11
オ	オ	オ	ウ		ウ	ウ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ		ウ
8	1	1	8		7	4	3	4	2	6	3	2	1	8	2	2	2	1	1	7	5		4
とぶんじ	ひろひ取	こぶんしは。	是は扨置		ひの しよぞんを引見ぜ	ざんしやたいぢの	地色 ぇ、ぐにん	地 まつひらゆるせ	通らるぞ。	たびのみち	きそのかけはし	小ヲクリ ぬれも。	あたのたはふれ	こゝろもなくて	心の月は。	みがくとくさも	そのはらや	下 くらぶまひぞの	思ひには。	恋ゆへたびを	をばすてや	あと見かへりて。	下ヲクリ おばな。まねけば

17	16	16	16		16	16	15	15	14	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	•	13
オ	オ	オ	オ		オ	オ	ウ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ
1	8	8	8		6	2	8	8	3	7	6	5	4	4	8	7	7	7	6	5	3	2
こぶんし	ひろひ取。	こぶんじは	是は扨置。		ぜひの しよぞんを引見。	ざんしやたいぢの	地色 詞 ゑゝぐにん	ゆるせ	とをらるゝぞ。	たびの道	きそのかけはし	小ヲクリ ぬれも。	あだの。たはふれ	心もなくて	心の月は。	みがくとくさも	そのはらや。	思ひには	くらぶまひぞの	恋ゆへたびを。	をばすてや。	跡見かへりて。	小ヲクリ おばな。まねけば

17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	16	16	16	16	16	16	16	16	16	16	15	15
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ
4	8	7	7	6	6	5	5	5	1	8	5	4	3	3	1	7	7	6	5	4	2
おり給ひ	先宗高殿	こぶんじへ	扨かはらけ	候と	こぶんじ聞召	ゆるし給ふへし	かけ給はん	其ふぜい	みどり子	けなげさよ	君にちう有	いかに千王丸殿。	引たて	かけさせて	引つくろひ	しやうぜられ	去程に。	今や〳〵と	あらためて。	やかたをへさして	ともかくも。	つき	ほり

19	19	19	19	19	19	19	19	19	18	18	18	18	18	18	18	18	18	18	17	17	17	17
ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ
3	7	5	5	4	4	3	3	2	6	5	2	1	8	7	5	3	3	2	1	8	6	5
おり給ひ。	いや先宗高殿	こぶんじへ。	扨かはらけ	候と。	こぶんじは聞召	ゆるし給ふべし。	かけ給はん	其ふぜい。	みどり子	けなげさよ。	君に忠有	いかに千王丸。	引たて	かけさせて。	しやうぜられ。	引つくろひ。	去程に。	今や。〳〵と	あらためて	やかたを。さして	ともかくも。	つき。	いほり

	18					18	18		18		18	18	18		18		18	17	
	オ					オ	オ		オ		オ	オ	オ		オ		オ	ウ	
	5					4	4		4		3	3	3		2		1	8	
	某はかまくらの飛脚此状上へあげてたへ。					北のかた姫君をかたはらに忍ばせ。こぶんしのもんに入御ばんのお衆頼み申さん。	源内道ふさ。		かゝる折からもりをか		ことふきは。しばらく	乱舞乱酒	つみかさね		一もん家中の人々は。		国中けふの御祝義として	おうだいを	
	20					20	20		20		20	20	20		20		20	19	
	オ					オ	オ		オ		オ	オ	オ		オ		オ	ウ	
	7					5	5		4		4	3	3		2		1	8	
	某はかまくらよりの使也。此状上へあげてたべ。					親子の人〳〵御供し。やう〳〵ゑちごにつきしかばこぶんじ殿のもんぜんにて。先北のかた姫君をかたはらにかくしをき。ばんの侍に近付て。	源内道房は岡		かゝる折から。森		ことふきはしばらく	乱舞乱酒	つみかさね。		一もんかちうの人々〳〵は。		かゝるめでたき折なれば	おうだいを。	

20	20	20	20		20	20	19	19	19	19	19	19	19	19	19		19	18	18		18
オ	オ	オ	オ		オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ		オ	ウ	ウ		オ
5	4	4	4		3	3	8	8	7	7	7	6	3	3	3	2	1	1	8	7	6
是ぞおや子の	ゆづられしは。	しそんに	宗高殿。		かみかきなでゝそ	仕れと	なでしこの	人々是は誠とか	宗高	おはしませ。	御子とや。	是こそ御身の	こなたへ〳〵と	うばひ取。	討てすて	ケ様〳〵の	御しんてい		はら〳〵となが	いそぎ帰りて	預れば		たうばんやがて
22	22	22	22		22	22	22	22	22	22	22	22	21	21	21	21	21		21	21	21		20
ウ	ウ	ウ	ウ		ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ		オ	オ	オ		オ
2	2	2	1		1	8	5	4	4	4	4	3	7	7	6	6	4		4	3	2		8
是ぞ親子の	ゆづられしは。	しそんに	宗高殿。		かみかきなでゝそ	仕れと。	なでしこの。	人々は是は誠か	宗高	おはしませ。	御子とや。	是こそ御身の	こなたへ〳〵と。	うばひ取。	うつてすて。	かやう〳〵の	御しんてい。		はら〳〵となが	きつと帰りて	あづかれば。	やがて	ばんの者請取て。

丁	オ/ウ	行	本文
20	オ	5	ふかきゑん。
20	オ	7	[色]聞もあへ給はず。
20	オ	8	存しに。
20	ウ	2	[フシ]ばんぜいらく
21	オ	3	夜いくさ
21	オ	4	五さいの時
21	オ	6	兄弟とやいはん
21	オ	6	おしからず。
21	オ	7	者はなし。
21	オ	7	さるによつて
21	ウ	2	一々
21	ウ	2	使を〽[三重]立らる丶
21	ウ	3	今日
21	ウ	6	しよの為なれば。
21	ウ	8	とあれば
22	オ	1	与世屋[マヽ]一人に
22	オ	1	かぎらす
22	オ	2	人々かずをしらず
22	オ	4	出んとや
22	オ	7	尤とどうしつ丶
22	オ	8	筆取にて
22	オ	8	[舞]先一ばんに
22	ウ	2	よしむら。

丁	オ/ウ	行	本文
22	ウ	3	ふかきゑん
22	ウ	5	聞もあへ[色]給はず。
22	ウ	6	存しに
22	ウ	8	ばんぜい。[ヲクリ]らく
23	ウ	2	よいくさに
23	ウ	3	五才の時。
23	ウ	5	[地ハル]兄弟とやいはん
23	ウ	6	おしからず
23	ウ	7	[色]者はなし。
23	ウ	7	[詞]去によつて
24	オ	1	一々。
24	オ	2	使を〽[三重]立らる丶。
24	オ	3	[詞]今日
24	オ	5	じよのためなれば
24	オ	8	とあれば。
24	オ	8	与市殿一人に
24	オ	8	かぎらず。
24	ウ	1	人〲数をしらず。
24	ウ	3	出んとや。
24	ウ	6	尤とどうしつ丶。
24	ウ	6	筆取にて。
24	ウ	7	[舞]先一[セメ]ばんに。
24	ウ	8	よしむら。[ハル]

丁	オ/ウ	行	本文
22	ウ	3	しげふさ
22	ウ	4	[ウ]物ならば
22	ウ	5	五たいに
22	ウ	6	をさめ
22	ウ	6	かと出と。
22	ウ	7	[中フシ]いきほひは
22	ウ	8	[ウ]おちぬべし
22	ウ	8	皆かんぜぬ者
23	オ	2	[地ハル]五十三人の
23	オ	2	[色]上らる丶。
23	オ	3	頼朝は
23	オ	5	[ハル]さ丶木四郎
23	オ	6	過つる
23	オ	7	しゆくぐはんのこと有
24	オ	3	すぐなからず。
24	オ	6	[地中ウ]頼朝きこしめし
24	オ	7	いかにからうのめ[色]ん〱。
24	オ	8	他のそねみ有とし[色]るせり。
24	オ	8	我石橋[ハル]山のかつせんに。

丁	オ/ウ	行	本文
25	オ	3	しげふさ。
25	オ	3	物ならば。
25	オ	5	五たいに
25	オ	5	をさめ。
25	オ	5	かど出と
25	オ	6	[中ウフシ]いきほひは。
25	オ	7	[ウ]おちぬべし。
25	オ	8	みなかんぜぬ。もの
25	ウ	2	[地]五十三人の
25	ウ	2	上らる丶。
25	ウ	4	頼朝公。
25	ウ	5	[ハル]さ丶きの四郎
25	ウ	7	[詞]過つる
25	ウ	8	しゆくぐはんの事有。
26	ウ	5	すくなからず。
26	ウ	8	[詞]頼朝聞召
26	ウ	8	いかにからうのめん〱。
27	オ	1	他のそねみ有としるせり。
27	オ	2	我石ばし山のかつせんに。

25	25		25	25	25	25		25		25	25	24	24	24	24	24	24	24
ウ	ウ		ウ	ウ	ウ	オ		オ		オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
5	4		4	2	2	8		6		6	1	8	4	3	3	2	2	1
さん候	詞 取なをし。 色 くちばの彦太郎しや	有か。	拗かぢ原が人の上を。たび〳〵ざんしたるせうこばし	ましませと	地色 よく〳〵	七代。		あづさわするゝとやらん		わすれさせ給ふ物かな。	天下を	せんぢん	頼朝が為には	今とても	中 色 ちうをつくす。	たゝかひにも	うち川	命を助け。
28	28		28	28	28	28		28		27	27	27	27	27	27	27	27	27
オ	オ		オ	オ	オ	オ		オ		ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ
8	8		7	6	5	4		1		8	3	1	6	5	4	4	3	3
さん候	ちばの彦太郎しやく取なをし。		詞 拗梶原がさんげんせりせうこばしあるか。	ましませと。	地 よく〳〵	七代		あつさわするゝとやらん		わすれさせ給ふ物かな	天下を	せんぢん。	頼朝がためには	今とても	忠をつくす。	たゝかひにも。	うぢ川	命をたすけ。

28	28	28	28	28	27	27	27	27	27	27	26	26	26	26	26	26	26	26
オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	オ	オ	オ
6	5	4	3	2	7	1	3	1	1	1	7	6	6	5	8	5	3	2
跡になが	一々。せつふく仕り	君御たいせつに	おほけれとも。	申付るより外は	わか者共我まゝを	其くび 詞	上意かな	ことのしさい	かぢ原を召出し。	頼朝聞召 中 地ハル	思召かへられ	聞わけられ	申に候はず。	御為を存じ。	成まじきと	いかにかぢ原が 詞 るざいなれば	し。	さやうにてはなし。 君聞召いや〳〵 地ハル 色 げ時を かほどふだうのか 地色
31	31	31	30	30	30	30	29	29	29	29	29	29	29	29	29	28	28	28
オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ	ウ	ウ
4	3	1	8	8	4	7	8	6	6	5	4	3	3	1	1	5	8	6
跡になが	一々せつふく仕り。	君たいせつに	をほけれ共	申付るよりほか	若者共が我まゝを 詞	其首 地色中	上るかな。	事のしさい 地	梶原を召出し。	頼朝聞召 詞	思召かへられ。	聞分られ。	申に候はず	御ためを存じ	成まじきと。	いかに梶原が	るざいなれば。	君聞召いや〳〵さやうにてはなし。 詞 げ時を か程ぶたうのか ヘル 色 中

28	オ	8	扨も〳〵
28	ウ	1	（色）先しばらく
28	ウ	1	（中）道理しごくの
28	ウ	3	見聞べし。
28	ウ	3	立のかば
28	ウ	3	おおそらく
28	ウ	4	さあらば
28	ウ	5	（中）うらみの矢
29	オ	1	さりながら
29	オ	3	（ハル）其時
29	ウ	1	をよばんと
29	ウ	4	（ハル）さういなし
29	ウ	6	はらさるゝ
29	ウ	7	さかゑ給ふ
29	ウ	8	中々中計はなかりけり

31	オ	6	（詞）扨も〳〵
31	オ	7	先しばらく
31	オ	7	（地）道理しごくの
31	ウ	1	（中）見聞べし。
31	ウ	2	立のかば。
31	ウ	2	をそらく
31	ウ	3	（地）さあらば
31	ウ	4	（中）うらみの矢。
32	オ	1	（詞）去ながら
32	オ	2	（地ハル）其時
32	ウ	1	（ウ）及ばんと。
32	ウ	3	さういなし。
32	ウ	6	はらさるゝ。
32	ウ	7	さかへ給ふ。
32	ウ	8	中々中。計はなかりけり

二

以上は『那須与一小桜威』（八行、山本版）と『那須与市小桜威并船遺恨』（八行、仁兵衛版）との同文またはそれに近い部分において、それぞれ使用されている文字譜の全部を調査したものであるが、そこに使用されている文字譜をまとめると次の「表二」のようになる。それぞれの文字譜の下の数字は、それぞれの作品の同文またはそれに近い部分に用いられている各種類別文字譜（句点も文字譜の一種とみる。二種合成された「ハルフシ」「地中」等々も一種として扱った。）の総数である。

〔表二〕

	那須与一小桜威	那須与市小桜威并船遺恨
。（句点）	67	140
ハル	30	19
ウ	30	21
色	14	8
中	19	14
地	10	17
フシ	9	8
地色	△6	△6
詞	5	16
地ハル	4	6
ヲクリ	（フシヲクリ 小ヲクリ を含む） 6	（フシヲクリ 小ヲクリ を含む） 8
地中	4	2
下	3	1
中ウ	△2	△2
スヘテ（スヱテ）	△2	△2
本フシ	△1	△1
三重	1	（トル三重を含む） 2
地ウ	1	0
中フシ	1	0

舞	△1	△1
セメ	0	1
中地	0	1
ハルフシ	0	1
上	0	2
トル	0	3
トル三重	0	1
キン	0	1
ノル（山本版フシ）	0	2
	総数二〇種	総数二六種

右両作品の文字譜使用の特性より、次に挙げる傾向（特性）をうかがうことができる。

〔表三〕

那須与一小桜威（八行本山本版）	那須与市小桜威并船遺恨（八行本仁兵衛版）
一、多出する文字譜（ハル・ウ・色・中・地・フシ）の頻度は山本版の方が多い。 110	(1)比較的少数（フシの内、一つはノル。） 88
二、地中・下・地ウ・中フシなど山本版の方が多い。 9	(2)これらについても仁兵衛版の方が少ない。 3
三、詞・地ハル・ヲクリでは山本版の方が少ない。 15	(3)詞・地ハル・ヲクリでは仁兵衛版の方が明らかに多数。 30
四、句点（。）は少ない。 67	(4)句点も曲譜の一種とみられ、山本版の約二倍。 140
五、舞 1	(5)舞 1
六、仁兵衛版に見られる中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノルなどの曲節がすべてない。 0	(6)中地1。ハルフシ3。上2。トル1。トル三重1。キン2。ノル1。と多彩である。
七、セメ 0	(7)セメ 1
八、（フシ）ノルと同所。前出。 0	(8)ノル（フシと同所） 1

右の表一・表三を整理要約すれば次のようになる。

〔表四〕

那須与一小桜威（八行本山本版）	那須与市小桜威并船遺恨（八行本仁兵衛版）
○文字譜総数20種（句点を含む）	○同上26種（句点を含む）
○右の内より同種・同数のもの（地色・中ウ・スエテ・本フシ・舞）を除くと15種。	○同上21種。
○同種・同数のものを除き、仁兵衛版よりも多い文字譜。ハル・ウ・色・中・フシ・地中・下・地ウ・中フシ（九種）	○同種・同数のものを除き、山本版よりも多い文字譜。句点・地・詞・地ハル・ヲクリ・三重・セメ・中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノル（十四種）

○右のうち、同一場所で両者異なるもの	○右のうち、同一場所で両者異なるもの
フシ（一種）	ノル（一種）

結び

以上、同じ題材を義太夫節浄瑠璃化した『那須与一小桜威』（山本版）と『那須与市小桜威#船遺恨』（本屋仁兵衛版）との二本をそれらに付けられた曲節の文字譜の面から比較検討してきた。

その方法としては二本の曲節（文字譜）の異同の比較を中心とするため、右両作品の本文が完全に同文であれば、曲節の相違が一目瞭然であるが、両者の本文に部分的に、いくらかの変化がある限り、異文の部分では両者の曲節にも異同を生ずる可能性が当然考えられるので、ここでは最初に述べたように、両者同文の部分またはそれに近い部分のみの全部を比較の対象とし、そこに付けられている両者の文字譜全部の相違だけを対象としたことは既述の通りである。この上に立っての調査結果が前掲の「表四」である。

まずこの表で知られることは、文字譜（句点を含む）の総数量が山本版よりも仁兵衛版の方において、六種類多いことである。

次にこの両版より、同種同数の文字譜五種（表二の内、数字の上に△印を付けたもの）即ち地色・中ウ・スエテ・本フシ・舞を除くと、山本版は十五種、仁兵衛版は二十一種となる。

更に右のように両版から文字譜の同種・同数のものを除いた後の両者の同一文字譜の使用度数の多少を比較すると、山本版の方で、仁兵衛版よりも使用度数の多い文字譜としては、ハル・ウ・色・中・フシ・地中・下・地ウ・中フシの九種となるのに対して、仁兵衛版の方では、山本版よりも使用度数が多く見られる文字譜が句点・地・詞・地ハル・ヲクリ・三重・セメ・中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノルの十四種にもおよぶのである。

しかも右の文字譜の各種類は山本版に於てはセメ・中地・ハルフシ・上・トル・トル三重・キン・ノルの計八種が全く使用されていないのに対して、仁兵衛版の方では、これらが使用回数こそ少ないが、すべて使用されているのである（表二参照）。

こゝに山本版とは異なる仁兵衛版の音曲的多彩さと変化とを発揮し、伝統ある山本版の権威に対する曲節上の抵抗の試みと努力とを見ることができるのであり、当時、権威を誇った山本版に対する他版のせめてもの抵抗と努力の一端を垣間見る思いがするのである。

たゞ最後に付記しておきたいことは小論では決して山本版を軽視するものではなく、（表三）の一、二が示しているように、義太夫節における、多出する中心的曲節においては、山本版は数量的にも仁兵衛版を完全に抑さえており、その権威を誇るものであるが、同表の三・(3)以下の各種曲節の多彩な変化では、他版（仁兵衛版）も亦よく山本版に抵抗して幅広い多彩性を発揮していることは軽視できないところであろう。

（一九八九年三月受理）